

「雪」（三好達治）解釈の鳥瞰図作成のためのノート

望 月 善 次
(岩手大学教育学部)

I はじめに

雪

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

右に示した三好達治の「雪」⁽¹⁾は、彼の作品の中でも、もっとも人口に膾炙している作品である。

旧制三高出身者の東大生を母胎として、梶井基次郎等によって創刊（一九二四年一月）された同人誌『青空』に達治が初めて作品を発表したのは、第十六号（一九二五年六月）からのことであるが、冒頭に示した「雪」は、その『青空』の第二十五号（一九二七年三月）に発表されている。後に、彼の処女詩集『測量船』（第一書房、一九三〇年十二月）に収載された。表記等の異同は、初出以来ない。ところで、この作品が人口に膾炙しているものであることは冒頭に述べた通りであり、達治作品に言及する多くの人々がこの作品に

言及しているのにも拘らず、今に至るも「雪」解釈の全貌は明らかにされていないとするが筆者の判断である。こうした現状に鑑みて、「雪」解釈の鳥瞰図を、問題点別に整理することによって示そうとするのが本稿における筆者の意図である。更に具体的に言えば、次章（Ⅱ章）において（原則的には）逐語的検討を通して、作品解釈に伴う問題点を剔出し、第Ⅲ章においては第Ⅱ章で立てた問題点に沿いながら、その問題点に関する諸説を、主として通時的に整理することによって示すこととなる。

尚、達治研究そのものからすれば、おそらく、その作品論的研究の一端に位置づけられるであろう本稿は、筆者自身にとっては、同時に、次に示す様な三重の意味においての基礎作業ともなっていることを附言したい。即ち、（主として小中学校を中心とする）国語科授業研究、「読み（Reading）」のレベル設定研究、（筆者の勤務場所である大学における）授業実践・報告研究の基礎作業的役割をも本稿に負わせようと考えているのである。筆者は、以上三つのそれぞれ点について、既に論文・口頭発表等によって、その第一次発表とも言うべきものを明らかにしているが、本稿を基礎作業として、これら三点のそれぞれについて第二次作業に着手したいと考えてい

る。従って、本稿においては、これら三つの点についての直接の言及は留保されていることを明らかにしておきたいと思う。

II 逐語的検討による問題点の剔出

本章においては、「雪」を逐語的に検討することにより、解釈上の問題点を剔出する。剔出された問題点は、それぞれ(a)のごとく記号を附すこととし、第三章において逐一検討を加えることとなろう。

最初に、もう一度作品を示すこととする。

雪

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

ところで、作品を読み始めるや、当然のこととして、読者はまず本作品の題名である△雪▽を眼にする。(a)

ついで、題名△雪▽に続く最初の行の冒頭に、読者は△太郎▽なる人名らしきものを眼にする。(b)人名だとするならば、典型的な日本人男子の名であるこの△太郎▽は、特定の個人を示すか否かの問題が脳裏を過ぎる。(b)

△太郎を▽(傍線引用者)——△太郎▽は客語として用いられている可能性が強いという予測を立てる。この予測は△眠らせ▽によって完結する。△太郎▽が客語であるならば、主語は誰(何)であろうか。(c)

ついで、△眠らせ▽の次にある読点に着目する。句読点の用いられぬことも多い詩作品の場合にあっては、これは留意せねばならぬ点である。(d)

△太郎(の屋根に)▽——再度△太郎▽が出現する。この再出現は意味あることであろうか。(e)△太郎の屋根▽——この表現は、日常的言語使用から考えれば、どうも飛躍が感じられる。(f)

△雪ふりつむ▽——「ふりつむ」の主語は、△雪▽であること確認する。とするとこの△雪▽は、△太郎を眠らせ▽にまで溯及しうるかの問題が起り(c)と対応する。

ところで、△ふりつむ▽は、どうして「降り積む」でなく、△ふりつむ▽と平仮名のみ表記なのか。(g)また△ふりつむ▽(傍線引用者)は、どうして△ふりつむ▽でなく△ふりつむ▽と文語表現を用いているのか。(h)

句点の存在により、この一「文」(4)の完結したことが確認される。そこで、改めてこの「文」を辿り返してみるとまずリズムとして

は△太郎を眠らせ▽△太郎の屋根に▽△雪ふりつむ▽と8・7・6の音数律の用いられていることに気がつく。(i)この8・7・6の音数律は、「雪」と、短歌や俳句の伝統詩型との関わりの問題を誘引する。(j)いったんリズムの問題が取り上げられるとすると、そこから、(母)音構造の問題もきわめて近い。(k)。また、△太郎▽△太郎の屋根▽△雪▽という叙述順序も、この詩を考えて行く上で、除外できぬ点であろう。(l)

△次郎を眠らせ、▽——△次郎▽が出現する△太郎▽という典型的な日本人名に伴う問題は(b)、この△次郎▽とセットになって表現される時に、明らかに一定の方向をもつ。

△次郎を眠らせ▽は△太郎を眠らせ▽と△次郎▽△太郎▽の一語を除いて全く同一であることが確認できる。前行において、「太郎を——、太郎の——」と同一行内において感じた或る繰り返しの感覚(e)は、横へも拡大されるのを予感する。(m)

△次郎の屋根に雪ふりつむ▽——兩行にまたがる繰り返しは、△太郎▽△次郎▽の部分を除いて、全く同一であることが確認でき

る。(四)。しかも、詩はここで終結する。

読み了えたところで、今まで、取り上げることのできなかつた問題のいくつかを列挙することとする。△太郎▽と△次郎▽との間柄は何か、(n)△雪▽の降っている場所はどこか、(o)「話者(speaker)」の位置はどこか、(p)などであり、更には、この作品への影響(q)や、「雪」と達治の他の作品との関連(r)をもあげうるであろう。以上、逐語読みという形態を用いながら、「雪」解釈の問題点をとり上げてみたが、こうした形態を用いたことも相まって右に列挙した問題点の中に包含され難いその他の問題点も存するであろう(s)。が、それはそれとして、読者に求められるものは、以上の問題点を踏まえた上での本作品への評価であろう。(t)

Ⅲ 問題点別の具体的検討

本章においては、前章で列挙した問題点(a)~(t)のそれぞれについて個別的に検討する。尚、その際、問題点が多岐にわたることに関連して、各項目についての詳細な検討はこれを留保すること、及び従来の諸説⁽⁶⁾については、これを通時的に示すことを原則として、このことを附言したいと思う。

(a) 題名としての△雪▽

本作品について、この題名の△雪▽に言及している文献はほとんどない。そうした意味においても「形象としての題名」のもとに左記のごとく説く西郷竹彦氏の言「古田・西郷△55▽(一九七〇) pp. 82~83⁽⁶⁾」は注目すべきものであろう。

私ならば、やはり、題名となっている「雪」という文字にまず着目させ、それを形象としてとらえさせたいと思うのです。つまり詩全体にか

かわる題名の「雪」のイメージをはじめに読者のなかに喚起しておき、それにつづいて、「太郎を眠らせ」のイメージをくりだしていくのです。この題名「雪」のイメージをはっきり意識化させないで第一行、あるいは第二行の主語のセンサクをおこなったのでは読みとりが不確かなものとなるでしょう。

一般に題名は詩本文を説明するもの、あるいは、詩の主題をあらわすもの……という考え方がありますが、私はむしろ、題名は詩の冒頭にあって、第一行のつくりだす形象に先行する形象であると考えています。しかも、この形象としての題名は、詩全体にひびきあうものとしての位置、役割をも占めています。(形象の相間性と全一性)

(b) △太郎▽△次郎▽という名称

△太郎▽△次郎▽について、これが特定の個人を指すか否かについては、解釈の揺れは存在しない。つまり、△太郎▽△次郎▽が特定の個人を指すのだという説は存在しないのである。従ってここでは、この用い方を「代名詞風」とした河上徹太郎△3▽(一九三九)や「勿論具体的な存在ではない」とした吉田精一△5▽(一九五一)などの、今回の検討資料中では、早期に属するもののみを挙げることにしよう。以上述べて来た考え方は、つまりは「この名前が意味ありげな新奇な意味をこめたのでないのがよい」[長谷川△70▽(一九七四)]という評価に連なるものであろう。

尚、△太郎▽△次郎▽という風に「いきなり姓でなく名が持ち出されている」[川本△80▽(一九七六)]ことや、△太郎▽△次郎▽の対比は、あくまで△太郎▽に対する△次郎▽という同性の男子であって、例えば花子という異性との対比ではないこと、「長谷川△71▽(一九七四)」にも留意すべきであろう。また△太郎▽△次郎▽という名称は、後に(c)言及する△眠らせ▽とも関連して、この両者が子供であるというイメージを招来するのであろう。

(c) \wedge 眠らせ \vee の主体

\wedge 眠らせ \vee の主体に関する問題点を筆者の考えに基いて整理し直すところから本節の考察を始めることとする。

(i) 例えば \wedge 太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ \vee の一行を例にとれば、前半の \wedge 太郎を眠らせ \vee においては、その主体が明示されていない。明示されていない主体を、読者は \wedge 眠らせ \vee から探らうとする。

(ii) その際、 \wedge 眠らせ \vee という語に引かれて、主体として生あるもの(人間)、更に具体的には \wedge 太郎 \vee (というおそらくは子供)を眠らせるに相応しい者としての母親などを思い浮かべる。

(iii) ところが、こうした予想は、後半の \wedge 太郎の屋根に雪ふりつむ \vee によって、一つの壁に遭遇する。即ち、 \wedge 太郎の屋根に雪ふりつむ \vee の主語である \wedge 雪 \vee を、前半の \wedge 太郎を眠らせ \vee の主語とすると「雪……眠らせ」となり、日常的言語使用の観点からは一種の不自然さが感じられるからであり、そうかと言って、前半の主語「母」を補ない、「(母)……眠らせ、雪……ふりつむ」と考えようとするにも強引さが感じられるからである。この困難さをいかに克服するか。

(iv) しかも(i)における困難さの克服は、単に例えば \wedge 眠らせ \vee の主語は \wedge 雪 \vee であるという風に断ずるのみの狭義の文法的事実を指摘するのみでなく、 \wedge 眠らせ \vee の主体云々が、詩語としての \wedge 太郎を眠らせ \vee の有効さを証明するものでなければならぬ。

以上示したとき四つの観点に基くならば、 \wedge 眠らせ \vee の主体云々についての解釈史の出発は、まず問題点の困難さ(特に(i)~(iv))を漠然と感じる所からなされたのである、と筆者は考える。「眠らせ」といふやうな抽象的な表現」(『3』(一九三九))とか「突急な象徴的な喚び起し」(『19』(一九六〇))とする河上徹太郎氏や「太

郎や次郎を眠らせる声は人間の声ではない」として「鳥語」を示した(『30』(一九六五))。田村隆一氏の発言の中にこうした状況の典型を筆者は見ると。

こうした状況において、山本健吉氏は『太郎を眠らせ』『次郎を眠らせ』というのは、母親の思いである。(『29』(一九六五) 傍線引用者)として(傍線部に微妙な問題を残しながらも) \wedge 眠らせ \vee の主体母親説と呼んでもさしつかえないであろう説を提出する。この山本氏の説は、先に示した四つの観点からすれば、(ii)の点に重心のある説であると筆者は判断する。

ところで、右に述べた山本氏の説は、古田弘氏の主として文法的立場からの批判をうける。「古田・西郷」55(一九七〇) pp. 72~75。氏は \wedge 眠らせ \vee の主語 \wedge 雪 \vee 説を展開するのであるが、次の部分の指摘は、就中重要であろう。

そうそう、こういう図式を示してみてもどうでしょう。雪を全文の主語とすると、

。 。 。 。 。
 となる。つまり、この詩をそのままにすなまに読み下せばそうなるのがあたりまえである。

ところが、「眠らせ」の主語が母であるとする。それは、「母」という主語を省略したことになる。主語の省略は、日本語の特長の一つである。しかし、この詩で、母が省略されているとするのは、平面論理・常識論理による考えかたにすぎない。そしてもし前半の主語を母とすると、つぎのような図式になるであろう。

。 。 。 。 。
 。

あの詩の一行の読み下しが、こういうふうになって、意識の流れは、
 スムーズに一息(意識的の一息)には読み下せないのである。

〔前掲 pp.74~75〕

右のごとき古田氏の説に対応しながら、それを更に止揚してみせたのが西郷竹彦氏であった。ところで西郷氏の説は、次にみるごとく筆者の先にあげた四つの観点の全てに答える形ともなっているので、以下、やゝ長きにわたる引用を行ないたいと思う。

読者は詩の冒頭において「太郎を眠らせ」ということばから幼な子という愛らしいものの形象とそれを眠らせている母性的なものの暖かい、やさしい形象を先取りするでしょう。しかし、それが「母」であるというたしかな形象にまではいたりません。にもかかわらず、冒頭において形成されたイメージ(形象)は、そのあとに引きつづく形象にひびき、あととまで、尾をひいていくのです。したがって、このあとに出てくる「雪」という形象は、先行する形象の人的、母性的、暖かい、やさしい、ふくよかなイメージを愛けて、何やら暖かい、やさしい、やわらかな、いつくしみをもった雪として感じとられてくるのです。

それにひきかえ、日常的な説明的な文章における「雪が降って」ということばは、冷たいという日常的なイメージしかひきおこしません。おなじ「雪」という語でも、その文脈の中での位置によってつまりこの詩においてはあたたかいという非日常的なイメージに転化させられていることがわかります。虚構とは、日常的な現実をふまえながら、それを越えた非日常的なゆたかなイメージとふかい意味がつけくりだされることであるというのが私の持論なのですが、この詩にもこの論理がみごとに生かされていると思うのです。

(中略)

この「雪」の詩は、「太郎を眠らせ」の主語をあえて伏せることによつて、母性的な暖かいやさしい、やわらかなイメージを読者の中にひき

おこさせ、それがあとにつづく「雪」の形象を方向づけているのです。

(中略)

文芸の本質から考えて、ここで「太郎を眠らせ」の主語をセンサクするよりも、むしろ「母」であるとともに「雪」でもあるという二重のイメージの重なったものとして、つまり「あいまいさ」において鑑賞させたい気持ちです。

右に示したごとき西郷氏の周到な論の提出にも拘らず、実は、詩壇・文壇においては、△眠らせ▽の主体母親説は撤回されていない。西郷氏が、国語教育を中心に活動されていることもあり、詩壇・文壇に属する人々の多くには西郷氏の業績(や古田氏の業績)が知られていないことにその最大の原因が求められるのであろうが、附言したいこともあるのでその点に言及することとする。

ところで、△眠らせ▽の主体母親説というべきものは、先に挙げた山本健吉氏によるのみ説かれていますのではない。晩年の達治の身近にあり、達治研究の上にも大きな役割を果たしている石原八束氏によつても読かれているのである。(△49)(一九六九) pp.11~14。他)石原氏の△眠らせ▽の主体母親説の背後にある考えは、『測量船』を「母への愛の詩集」(△57)(一九七〇) p.163」とするところから来ているものと考えられる。

詩壇等における△眠らせ▽の主体母親説への批判は、安西均(△76)(一九七五) 吉本隆明(△77)(一九七五) 大岡信(△85)(一九七七) 佐々木幸綱(△102)(一九八〇)等の各氏によってなされているのであるが、各氏の批判が、石原氏の場合には、氏の基本的考えである『測量船』への考え方そのものの批判に達していない点、また山本氏の場合には、詩壇人の批判が先に筆者のあげた四つの観点のうち(二)の段階に達していないと山本氏が判断されているところから、両氏とも△眠らせ▽の主体母親説を撤回するに至っていない

のではないのかというのが、筆者の判断である。
 筆者の判断の正否は「まずおくとしても西郷説への無知(無視)が、多くの詩壇人にとっては、西郷氏とは別に独自でほとんどの内容に達した入沢康夫氏(〔100〕(一九七九) pp.168~172)の出現に至るまで、ほとんどの月日を空転せしめたのだということは、断言しておいてさしつかえないであろう。

(d) 句読点

「雪」所収の『測量船』に限ってみても、句読点は、散文詩以外においては、あまり使用されていない。ここに、短詩型運動からの影響の具体相の一つを見ようとする考え〔小野〔84〕(一九七七)の現出する所以であろう。

また、句読点の存在により、「8、76。8、76。」のリズムはより鮮明になるとすべきであろう。(c)における古田発言、および、(i)の(ii)をも参照されたい。

(e) 太郎の再出

太郎の再出の問題は、従来の解釈史上の一つの盲点とも言うってよい問題であろう。「外面的音楽形成」の一部として、この太郎の繰り返しを指摘した長谷川泉氏(〔70〕(一九七四))や、『等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する』という詩的機能の観点から、このことにも言及した川本茂氏(〔80〕(一九七六))の言もあるが、このことの意味をより深化させて示したのは、次のとき入沢康夫氏の発言であろう。(〔100〕(一九七九) p.170)

第一行と第二行が、「太郎」「次郎」のちがひだけで、あとは全く同じ文から成っていることは、これは誰しも着目し、口にもしてあるわけだが、この点はまた、それぞれの行で、「太郎」「次郎」が二度くり返され

ていてこと(太郎を……、太郎の……/次郎を……、次郎の……)と結んで考へねばならないことのやうに、私は感ずる。この同一行内での太郎(第二行では次郎)のくり返しが、各行の前半と後半とを分離させる。つまり、雪を主体として意味伝達を眼目に文をととのへれば、

雪は太郎を眠らせ、その(眠っている)屋根の上にふり積もって行くといったことにならうが、作者は、「雪」を「雪ふりつむ」といふ、2・2といふ小さきみのリズムを持つ一かたまりの語句の中に(主格助詩も省いて)押しこめ、しかも行末に配置し、その一方で、太郎(次郎)の語を二度もくり返すのである。くり返され、くり返されることによつてよく響く「太郎(次郎)」が、何よりもまづ、読者に強く印象づけられ、それによつて行が前半と後半に分れるといふ感じがする。

(f) 太郎の屋根の非日常性

太郎の屋根という表現は日常的には、あまり用いられない。「通常、私たちは『太郎の家に』とか『太郎の家の屋根に』とかいうはずです。いや、もっと世間的にいうなら『西郷の家』とか『古田さんの家』とか名よりも姓のほうを冠することが多い」「古田・西郷〔55〕(一九七〇) p.83」からである。仮に「名字のない昔の言ひ方として、『吾作の屋根』『新一の屋根』といった言ひ方があったかもしれないが、その場合でも家長の名であらう。」「入沢〔100〕(一九七九) p.171」と考えられるからである。

以上の事実を考えるならば、我々は太郎の屋根の表現に注(10)で掲げた中村明氏の「結合比喩」を援用することが可能になるであろう。即ち、太郎の屋根における助詞「の」は、所属を示すのみでなく、喩詞(太郎)と、被喩詞「屋根」とを結合する機能をも併せ有しているのだと言つてよく、(後に述べる(i)の(ii)なども関連しながら)太郎/や/屋根/をきわだたせているのである。

(g) △ふりつむ▽の平仮名表記

文字表記の相違が読者にどうした感じをもたせるかについては微妙な問題が多い。筆者としては、現状においては、この問題への深入りは避けたい思いをもつ。

ここでは、表記が「降り積む」という漢字混り表記ではなく△ふりつむ▽と平仮名表記となっていているところから「やわらかい静かさ」〔古田・西郷△55▽（一九七〇）p.74〕を感じる意見のあることを指摘するにとどめたい。

(h) 「文語」的か「口語」的か

△ふりつむ▽（傍線引用者）は、現代語で言えば「ふりつもる」であらう。それに関連してか、この作品に対して「口語」的とか「文語」的とする評言が見うけられる。

諸説を大別すると、「口語」もしくは「口語調」とするもの〔那珂△33▽（一九六六）、萬田△75▽（一九七五）〕「文語調」とするもの〔長沢△94▽（一九七九）△104▽（一九八〇）〕および両者の混在とするもの〔小野△84▽（一九七七）、畠中△101▽（一九七九）p.174〕との三者に分けることができる。

ところで、これらの諸説は、「口語」と「文語」とをどう規定するか、またそれぞれの規定に基いて具体的に作品のどの部分をその根拠として用いているかの二点を明示していないところに共通の弱点を有する。

筆者としては、曖昧性の残る「文語」「口語」という二分法を用いるよりも、この作品に即して言えば次のごとき二つの二分法を用いることを提唱したい。即ち、一つは、現代語的か古典語的かの二分法であり（その際は△太郎を眠らせ▽の「を」、△太郎の屋根▽の結合比喩性が、その判断を左右するであらう。）もう一つは、散

文的か韻文的かの二分法である。（その際は、「韻文」の定義の明確化が求められるであらう。）

(i) 8・7・6の音数律

8・7・6の音数律をどう見るかについては、二種の説をあげることができる。

一つは、この音節数が、8・7・6と漸減していることに注目する考え（この考えは、更にそれが雪の静かに降っている姿を暗示しているのだとするところにまで共通点を有する）である。〔川本△88▽（一九七六）、原崎△95▽（一九七九）〕

またもう一つは、8・7・6が7という「きわめて伝統的な音律」を中心としていることに注目する説である。〔菅谷△42▽（一九六七）p.157〕

(j) 短歌的か俳句的か——実験の意味

この作品が、8・7・6 || 21（二行では8・7・6、8・7・6 || 42）という音数律をとっているためか、この作品を短歌的もしくは俳句的とする説も多くある。

伊藤信吉〔△10▽（一九五三）〕河上徹太郎〔△19▽（一九六〇）〕は短歌的に近く、阪本越郎〔△41▽（一九六七）〕高田敏子〔△61▽（一九七二）〕は俳句（俳諧）的に近く、石井昌光〔△12▽（一九五五）〕伊藤信吉〔△34▽（一九七三）〕原崎孝〔△95▽（一九七九）〕は短歌、俳句の両者を並列させている。

このうち、短歌的とした際の伊藤信吉氏は「短歌に近い小さな詩型」、また俳句的とした阪本、高田の両氏にはそれぞれ、「単純をめざす、意識的な語節約」「俳句のようにあっさり」として、その根拠を述べているのであるが、その他の論者の根拠は明らかにされていない。（尚、具体的にどの部分をもって、短歌的もしくは俳句

的としているかの指摘は全ての論者に欠落している。「親類筋になるのが、俳諧と短歌と説はわかれるにしても」なる吉田精一氏の言(45)(1968) p.294 のある所以であろう。

短歌的、俳句的なる用語を用いるとすればそれぞれの用語の規定と、作品への具体的な言及とが求められること前節と同様であろう。ところで、その評言が、短歌的か俳句的かについては分れるしろ、この作品が「短歌や俳句とは別の一つの新しさ」(伊藤(信)4)(1940)を有していたことは、左記に示す伊藤信吉の著名な言の示す通りであろう。

この短章で作者は、なにを具体的に試みたのだろうか。これを現代抒情詩の形成という点からみれば、作者は意識的に、わざわざ短歌に近い形式をもちいたのである。つまり短歌に近い小さな詩形をもちいるとき、その抒情は、伝統詩の方へよりつく傾くものか、それとも現代詩としての新鮮さを獲得することができるものか——そうした実験がおこなわれたのである。

〔伊藤(信)10(五五三)〕

尚、右に示した伊藤発言は、「雪」の実験の意味を肯定的に受けとめようとしたものであるが、伝統詩の方へ傾いたものとして否定的に受けとめようとする見解(鮎川38)(1966)のあることもつけ加えておこう。

(k) (母) 音構造

この作品の音構造について説く論者もある。△雪ふりつむ▽が、I音U音のたたみこみであることを言う説(竹中16)(1959)、川本80(1976)や、△ふりつむ▽が「ム(M)音」という口をつぐんだ形」で終了しているのが「種み重なって行く雪の感触を示している。」(原崎95)(1979)とする説などである。

音構造の意味に与える影響についての考察は慎重でありたいとするのが筆者の現在における考えであるので、これ以上の具体的考察はさし控え、岡井隆氏にならって、この作品の母音構造を示すにどめたい。

a o o o e u a e, a o o o a e i u i u i u u.
i o o o e u a e, i o o o a e i u i u i u u.

(l) 叙述順序…△太郎▽↓△太郎の屋根▽↓△雪▽

この作品の叙述順序が△太郎▽↓△太郎の屋根▽↓△雪▽となっていて、それが日常的叙述とは異なり「イメージの展開の過程」となっていることを示したのも西郷竹彦氏であった。「古田・西郷55(1970) pp.76~77」。

この詩の第一行を、かりに日常的な説明的な文章に書きなおしてみますと、たとえば、「雪が降って太郎の屋根に積もり、太郎はいまごろすやすやと眠っていることでしょうか。」とでもなるでしょうか。つまり、私たちが冬の夜半、戸外に出たとして、そこでジンジンとして音もなく降る雪のさまを眺め、さらにその雪の下におおわれうすくまっている家々のたたずまいに眼をやり、そこからその家の太郎のやすらかな眠りをまで想像する——こういう認識の順序、また表現の順序が日常的なものであると思うのです。ことばをかえていえばここに展開されたイメージは「雪↓家↓太郎」という外から内への、あるいは「自然↓もの↓人」という図式を形づくっています。

ところが、詩句のほうは「太郎↓家↓雪」「人↓もの↓自然」(内↓外)という非日常的・非説明的なイメージの展開の過程(形象相関の展開の筋)をとっています。日常的な場でまず認識主体が雪の夜景にたたずんで、すぐさま、「ああ、太郎は眠っているな」と家の中でやすらかな眠りにについている太郎のことを想い、それから「雪が降りつもっている」

ととらえることはまずありません。すでにこの詩のイメージの展開される、くりひろげられる順序、過程、筋道が非日常的なのです。

(n) リフレイン

冒頭の一行「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ」に続いて、次の「次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ」の一行を読み下すと、二つの行が「ほとんど同じ言葉の繰り返し」(「伊藤(信) <10> (一九五三)」)であることを確認する。(より厳密に言えば、二つの行は、「△太」▽「次」▽の相違のみで繰り返されている。「川本 <80> (一九七六)」。この作品に対して「シンメトリカル」(「吉田 <9> (一九五三)」)とか「中国風の門の両脇にかかげる対聯」(「竹中 <16> (一九五九)」)のごとき評言の早期から存した所以であろう。

ところで、「太郎▽次郎▽」の相違のみという「変奏をとまなう反復」(「古田・西郷 <55> (一九七〇) p. 84」)によってもたらされるものは何であろうか。以下二つの側面から整理をはかることとしよう。

一つは、この変奏が「次郎▽」なる具体へと踏み出された点である。(b)をも参照)「次郎▽」という、これまた男性でしかもありふれた名前の出現によって、変奏は一定の傾向を帯びる。しかも「太郎▽次郎▽」の二つの対比は、(他の同一リフレインの部分とも相まって)「順序数の暗示」(「菅谷 <42> (一九六七) p. 158」)をうける。作品構造の上からは「二行詩だからいいのだ。次に三郎、四郎、五郎となったら身も蓋もない」(「清水 <99> (一九七九)」)ことを認めながらも、或る広がりを感じを誘引されるのである。(尚、次節(n)をも参照されたい。)

もう一つは、876、876と繰り返される点に注目することとする。(その際、この繰り返しを、同一行内における「太郎▽次郎▽」の再出の問題と相関させて考えねばならぬことについては既に

述べた。——(e)「太郎▽次郎▽」の相違はあるものの、ほとんど同一内容の繰り返しは、そこに一定のリズム感を生起させる。「達治の詩に特有な繰り返し(ルフラン)による外面的音楽性」(「長谷川 <71> (一九七四)」)の典型がここに成立する。即ち、この作品の有する「微妙な音楽」(「中野 <39> (一九六七)」)や「短いみでなく記憶されやすい何物」(「安東 <54> (一九六九)」)は、主としてこの点に関連し、結果としてこの作品は、「自然に人の口へのぼって愛誦される」(「伊藤(整) <1> (一九五六)」)ことになったのである。

もっとも、こうした「音楽」性に対しては、単なる「語呂合せ」(「中原 <2> (一九三三) 推定)」にすぎないとして否定する見解のあることをも附言しておかねばなるまい。

(n) 「太郎▽次郎▽」の間柄

「太郎▽次郎▽」とはどうした間柄か、つまり両者は兄弟であるか否かの論点は、この決定に深く関わる「太郎の屋根▽次郎の屋根▽」とは同一のものを指すのか(「太郎▽次郎▽」とは同一箇所)に眠っているのか)と相まって、この作品をめぐる論争点の主たるもの一つとなっている。

近年においても、それぞれに呼応した中桐雅夫(「64」(一九七三))、安西均(「76」(一九七五))、山本健吉(「89」(一九七七))、入沢康夫(「87」(一九七七))、<100>(「一九七九)」、各氏の整理もあるのであるが、ここでは、従来の諸説を非兄弟説、兄弟説、両者許容説の三点から、もう一度整理し直すこととしよう。(以下、各観点毎に人名・年のみを通時的に示すこととする。)

〔非兄弟説〕

吉田精一(「5」(一九五一))、<9>(「一九五三)」、神保光太郎(「32」(一九六五))、中野重治(「39」(一九六七))、(「菅谷規矩雄 <42> (一九六七))、飛高隆夫(「51」(一九六九))、村野四郎(「52」(一九六

九）、古田拡・西郷竹彦（〔55〕（一九六九））、高田敏子（〔61〕（一九七二））、長谷川泉（〔71〕（一九七四））、入沢康夫（〔87〕（一九七七））、原崎孝（〔95〕（一九七九））。

〔兄弟説〕

伊藤信吉（〔10〕（一九五三））、〔11〕（一九五四））、中桐雅夫（〔64〕（一九七三））、安西均（〔76〕（一九七五））

〔両者許容説〕

山本健吉（〔29〕（一九六五））但し、個人的には兄弟説）、阪本越郎（〔41〕（一九六八））但し、個人的には非兄弟説）、安西均（〔47〕（一九六九））

非兄弟説の根拠は、「別々の屋根の下に眠る子供」（阪本〔41〕）を考える方が鑑賞が深まるところと、その根拠としての八太郎（〔41〕）の無名性（〔入沢〔87〕〕）などにあるのに対し、兄弟説の根拠は「太郎は長男、次郎は次男にごくふつうにつけられる名前でもある」（〔中桐〔64〕（一九七三） p.184〕）点と「作者の視線の焦点は一軒の家（その中の兄弟の寝姿）にしぼられてはいるが、視野のなかには——ややつフトフォークスに——聚落も映っている。」（傍点）は原文、安西〔76〕（一九七五） pp.86～87」のでありそれ故に、次のごとき叙述のあったのだとするとところにある。

だが、同じ家族だとすれば、「太郎の屋根」「次郎の屋根」と、屋根が複数に見えるように表現するのは、おかしいではないかと疑問をもつ人もあろう。私は、必ずしも、おかしくも不自然でもないと思う。この表現は詩歌でよく用いられるくり返しの手法と見てもよいからである。くり返すことよって強調し、印象を深めようとする、あの手法の応用である。そして、また、太郎と次郎と二人いるからこそ、この家庭もこの子たちも寂しくない。

〔安西〔47〕（一九六九）〕

筆者としては、この作品のこの部分において、二者択一的に正否を決するのは誤りであるという考えに立つ。従って、こうした際における留意点は、西郷竹彦氏の説くごとく〔西郷〔63〕（一九七三） p.119〕、「解釈に唯一の正解」を求めるとでなく「ただ、よりおもしろい、より意味ぶかい解釈がありうるのだ」とする点にある様に思われる。

尚、兄弟説の一変異として、兄弟分住説とも言うべき説〔中村〔88〕（一九七七） pp.13～14〕の存することをも附言しておこう。

(o) 場所——都会か田舎か

作品の世界の具体的場所についても、都会か田舎（農村・漁村）かについての議論がある。

当初は「農家」の家屋を想像した竹中郁氏（〔6〕（一九五一））をはじめとして「民家の群落」（阪本〔41〕（一九六七））「村落共同体」（菅谷〔42〕 p.158）等、田舎（農村・漁村）説が大勢を占めていた。（伊藤信吉氏による「民話風」（〔10〕（一九五三））なる指摘も、このバリエーションと考えてよいであろう。）

これに対して、都市も可能ではないのかとしたのは中野重治氏（〔39〕（一九六七））であり、それは、つまりは読む人の心によるのだとした小川和佑氏の次のごとき言に結実されることになる。

読者はその少年時の雪の夜の原体験にあわせて、様々な背景に「太郎の屋根」「次郎の屋根」を思い浮かべるであろう。「太郎の屋根」が大都市の片隅にあってもよく、「次郎の屋根」が漁村にあってもよいと思う。この時、概念の中にある土俗的な共同体としての日本の農村を思い浮かべねばならぬ理由はない。

〔83〕（一九七〇） pp.211～212

この場所をどう考えるかは、おそらくは八雪の形状をどうした

ものとして思い描くかにも影響を与えるのではあろうが、少なくとも、小川氏以後においては、民家の群落単一説とも言うべきものは否定されねばならぬであろうと筆者は考えている。

尚この問題に関連して、梶井寿郎氏が、この作品の「素景」として「達治が幼少のころ祖母に引きとられてすごした三田」〔74〕（一九七五）p.53（一九六九）を挙げていることおよび石原八束氏によって、達治自身は、「後年、この『雪』のイメージを夜半亭蕪村の名画『夜色春台』のそれに比した」石原氏の説を喜び、自作朗読のソノシート挿絵にまで採用したという「石原57」（一九七〇）p.164「有名なエピソードが紹介されていることを附言しておく。

(p) 「話者 (speaker)」

「話者 (speaker)」という観点から、この作品を整理しようとする説は、今のところ確たるものとはなっていない。

しかしながら、「この発想は……この世界を避か彼方から眺めて設定したものである。」「河上19」（一九六〇）や「旅の夜汽車から見た雪景色」〔高田61〕（一九七二）という発言の妥当性の吟味は、「話者」論的観点との検討と相まってこそ十全なものとなりうるのだと筆者は考えている。

(q) 本作品への影響

「雪」作品へ影響を与えたであろうもの三点を挙げることにする。一つは、北川冬彦の影響になる短詩型運動〔小川83〕（一九七〇）p.211、小野84（一九七七）からの影響であり、二つは、レミ・ドウ・グルモン (Remy de Gourmont) の「雪」(La Neige) からの影響であり、三つは、室生犀星詩からの影響〔入沢100〕（一九七九）である。

ここでは、二つの目のレミ・ドウ・グルモンの「雪」からの影響

についてのみ敷衍することとする。即ち、グルモンの「雪」を達治は、堀口大学訳によったのか、それとも上田敏訳によって知ったのかの問題である。達治の「雪」とグルモンの「雪」との関連について初めて指摘したのは、伊藤信吉氏であるが、氏はその際堀口大学訳を挙げているのであるが〔伊藤(信)10〕、これは、後日、安田保雄氏によって上田敏訳ではないのかと反論されている。〔25〕（一九六三）

また新藤千恵氏は、そのアンソロジー編集に際し、達治の「雪」のあとに上田訳のグルモンの「雪」をさりげなく配し〔31〕（一九六五）、菊池由美氏は、堀口訳を掲げているが〔104〕（一九八〇）両氏の場合は、その根拠は明示されていない。

(r) 「雪」と他の達治作品との関連

「雪」が達治の作品であることに注目すれば、達治の全作品は「雪」と或る関連をもつこととなる。しかしながら、ここでは、そうした関連を狭義なものに限定して、以下に示す三種の作品群についてのみ言及することとする。

一つは、達治の雪を扱った作品である。そのうち、もっとも注目すべきは、本稿で取り扱っている「雪」と同じく、同じ『青空』の第二六号に、同じ「雪」という題名のもとに発表された左記のごとき作品であろう。〔安田24〕（一九六三）、小川83（一九七六）p.212

雪

雪ふりつもあり、足跡みなかげをもてり。
いそぎ給はで、雪はしづかにふみ給へ。

尚、達治の作品で、その他に「題名」に「雪」を含んでいるもの

を『三好達治全集』(1)～(3) (筑摩書房、一九六九・十～一九七〇) 十二) の範囲で示すと左記のごとくなる。

- 「私と雪と」 △『測量船』▽
 「雪景」 △『間花集』▽
 「雪」 △『山果集』拾遺▽
 「雪夜」一～三 △『山果集』拾遺▽
 「雪後」 △『山果集』拾遺▽
 「新雪」 △『艸千里』▽
 「雪はふる」 △『砂の砦』▽

二つ目は本稿で取り上げている「雪」の△太郎▽に着目しようとするものである。小川和佑氏による「太郎」△測量船』拾遺、初出は『信天翁』、一九二八～三二への着目△69▽(一九七四)は、こうした前提によるものであろう。

第三は、「雪」の(対称的な二行という)構造に関連する。「雪」が対称的な二行の作品であることに注目するならば、例えば『測量船』で言えば、冒頭の「春の岬」や「春」などとの対比も問題になるが、その繰り返しのある方とも関わって着目されることが多いのは左記のごとき「祖母」△測量船』拾遺、初出は『青空』第十六号、一九二五～一六)である。「小川△83▽(一九七〇) p. 33、西郷△62▽&△63▽(いずれも一九七三)、小野△84▽(一九七七)」

祖母

祖母は螢をかきあつめて
 桃の实のやうに合せた掌ての中から
 沢山な螢をくれるのだ

祖母は月光をかきあつめて
 桃の实のやうに合せた掌の中から
 沢山な月光をくれるのだ

(s) その他の問題

(a)～(f)の枠組の中に組みこむことの困難であった問題について二つの点について項目のみを列挙しておきたい。

一つは、井伏鱒二氏による「夜の青い鳥も眠っているような感じがする」△50▽(一九六九)、△78▽(一九七六)とする説である。大岡信氏△85▽(一九七七)、中村稔氏△88▽(一九七七) pp. 10～14)などの共感を得て一定の影響力を有している。

菱山修三詩との関連も枠組に入り切れぬものであった。安田保雄氏△24▽(一九六三) p. 128) 中桐雅夫氏△64▽(一九七三) p. 190) が、それぞれ異なる作品を具体例として論じている。

(t) 「雪」の評価

「雪」への評価は一般的には高い。吉本隆明△13▽(一九五六)菅原克己△23▽(一九六三) 鮎川信夫△38▽(一九六六)、菅谷規矩雄△42▽(一九六七)などの否定的見解を(数の上からは)例外とすることができ。

尚、谷川俊太郎氏のごとく「当時としてはものすごく新鮮だけれど月並」(中村・大岡(信)・谷川△98▽(一九七九))として、発表当時と現時点における評価とを区別しようとする考えのあることをも附言しておこう。

IV おわりに

本稿は、「雪」解釈に伴なう問題点を列挙し、その問題点のそれ

それについて、(概観的にはあるが)具体的検討を加えることによって現在のところ提出されていない「雪」解釈の鳥瞰図を作ろうとした試みであった。また、そのことが筆者自身にとっては同時に(主として小中学校を中心とする)国語科授業研究、「読み(Reading)」のレベル設定研究、(筆者の勤務場所である大学における)授業実践・報告研究の三つの方面における基礎的研究をも兼ねるものでもあった。

今後、今回直接的には言及することのできなかつた資料等により本稿自身を補なうと共に、本稿を基盤として前述の三方面における第二次的作業を進めたいと考えている。

注

(1) 達治には、「雪」と題する作品が、他に二つある。ここに示した作品と並んで、同じ『青空』第二五号に同時発表されたもう一つの「雪」と、『山果集』拾遺、に収載されているものである。

尚、本稿においては、以後特に断わりのない限り「雪」とは、本論冒頭に示した作品を意味するものとする。また、作品の表記は以下と同じく『三好達治全集』(1)〜(3)(筑摩書房、一九六九―一九七〇―一二)によることを原則とする。

(2) 例えば左記参照。

渡辺皓介、望月善次、横須賀薫『「雪」(三好達治)の授業』(教授学研究の会編『事実と創造』No.5(一荳書房、一九八一―一十)pp.14〜29)。
望月善次『「読み」のレベル設定に関する一考察——三好達治「雪」を具体例として——』(第62回全国国語教育学会、(於お茶水大学、一九八二・八・二))。

望月善次「国語科教師教育におけるマイクローチーニング(2)」(第21回国立大学教育工学センター協議会(於宇都宮大学、一九八二・一〇・一))。

(3) 題名の次に作者が附される場合もある。が、本稿においては、「測量船」発表時にならってこれを省略する。勿論、作者など、どうでもいいのだと言うのではない。

(4) ここでいう「文」とは、(語—文—文章)なる関係における「文」である。

(5) 本稿において、直接の検討を加えたものを左記に通時的に示すこととする。(直接目を通し得たものに限定した為、通時的には問題となるものもあるが、それらについては個々の文献毎に注記したい。)尚、ページ表記は「雪」に直接言及している箇所のみが示してある。また第62回全国国語教育学会の口頭発表(注(2)参照)との関連で言えば、当日提示した「雪」文献目録から、国語科授業実践に直接関わるものを除外したものが本稿の直接対象の概要ということになる。

(1) 伊藤整『若い詩人の肖像』(新潮社、一九五六・八) p.349。尚、本文献を(1)として扱うのは、該当部分の叙述が一九二八年時の回想を扱ってその叙述に信頼性があると考えられるためである。

(2) 中原中也『芸術論覚え書き』(一九三三―三四、推定)『中原中也全集 第三卷』(角川書店、一九六七・十二) p.89。※年代推定は、上記全集の推定によっている。

(3) 河上徹太郎『三好達治「春の岬」』(『新女苑』(一九三九・七)『河上徹太郎全集 第二卷』(新潮社、一九八一―一二) p.247)。

(4) 伊藤信吉『現代詩人論』(河出書房、一九四〇―一七) pp.123〜124、p.132。

(5) 吉田精一『日本近代詩鑑賞 昭和編』(天明社、一九五一―四、新潮社、一九五四―二) p.67。

(6) 竹中郁『三好達治』(北川冬彦他編『現代詩鑑賞 昭和編』(第二書房、一九五一) pp.194〜195)。

(7) 安田保雄『達治の詩の意味するもの』(『国文学 解釈と鑑賞』Vol.17 No.2(至文堂、一九五二―二) p.38)。

(8) 丸山薫『三好達治論』(『創元』(一九五三―四)『丸山薫全集』(4)(角川書店、一九七七一) p.42)。

- 〈9〉 吉田精一『現代詩』（学燈社、一九五三—一六）pp.200〜201。
- 〈10〉 伊藤信吉『現代詩の鑑賞』（新潮社、一九五三—一）『新潮社文庫版』（一九五四—四、一九六八—五）pp.139〜141。
- 〈11〉 伊藤信吉『現代詩人全集（Ⅱ）』（創元社、一九五三—一）p.439。
- 〈12〉 石井昌光『三好達治——現代詩における伝統と創造——』（宮城女子大学研究論文集）第八卷、（一九五五—一）pp.203〜204。
- 〈13〉 吉本隆明『四季』派の本質——三好達治を中心に——（『文学』（岩波書店、一九五八—四）p.492。
- 〈14〉 武田元治『詩人研究Ⅲ三好達治』（『国文学 解釈と教材の研究』Vol.3、No.6（学燈社、一九五八—五）p.76。
- 〈15〉 村上菊一郎編『近代文学鑑賞講座 第二十卷 三好達治・草野心平』（角川書店、一九五九—二）pp.19〜20。
- 〈16〉 竹中郁『三好達治について とつおいつ』（村七、前掲書、p.140）。
- 〈17〉 嶋岡晨『教科書の詩と二人の詩人』（『近代文学鑑賞講座、月報（7）』（角川書店、一九五九—二）p.6。
- 〈18〉 石井昌光『三好達治』（『国文学 解釈と教材の研究』Vol.5、No.7、（一九六〇—五）〈12〉と内容。
- 〈19〉 河上徹太郎『異端と伝統』（文芸春秋社、一九六〇—一）p.112。
- 〈20〉 山本健吉『三好達治の人と作品』（『小説中央公論』第三号（中央公論社、一九六一—一）p.186）。
- 〈21〉 伊藤整『詩の世界』（初出不詳）（伊藤整『作家論』（筑摩書房、一九六一—二））『伊藤整全集（20）』（新潮社、一九七三—一）pp.324〜325。
- 〈22〉 安田保雄『三好達治』（『国文学 解釈と教材の研究』Vol.7、No.14（一九六二—一）pp.118〜119）。
- 〈23〉 菅原克巳『三好達治の詩』（『教育科学 国語教育』No.56（臨時増刊号）（明治図書、一九六三—七）pp.191〜192）。
- 〈24〉 安田保雄『青空』時代の三好達治——『測量船』研究序説』（『鶴見女子大学紀要』第一号、（一九六三—一）p.117 & pp.128〜130）。
- 〈25〉 安田保雄『海潮音』以後の上田敏と近代詩人』（『立教大学 日本文学』No.11（一九六八—一）pp.19〜21）。
- 〈26〉 杉山平一『三好達治』（『詩学』No.204（一九六四—五）p.14）。
- 〈27〉 奥野健男『三好さんと最後に飲んだかなしき』（『本の手帖』Vol.4、No.5（昭森社、一九六四—六）p.77）。
- 〈28〉 中村稔『三好さんの死』（『本の手帖』Vol.4、No.5、pp.46〜47）。
- 〈29〉 山本健吉『ことばの歳時記』（文芸春秋社、一九六五—五、一九八〇—一）pp.247〜248。
- 〈30〉 田村隆一『鳥語——達治礼賛』（『萩原朔太郎・三好達治・西脇順三郎』月報（一九六五—七）『現代詩読本 7 三好達治』（思潮社、一九七九—五）p.234）。
- 〈31〉 新藤千恵『若い人への詩』（社会思想社、一九六五—七）pp.169〜170）。
- 〈32〉 神保光太郎編『三好達治詩集』（白鳳社、一九六五—八）p.178）。
- 〈33〉 那珂太郎『測量船（三好達治）』（『国文学 解釈と鑑賞』Vol.31、No.1（一九六六—一）p.89）。
- 〈34〉 伊藤信吉『三好達治——往事の中から』（一九六六—一）（『私の詩的地帯』（彌生書房、一九七三—一）pp.72〜74）。
- 〈35〉 文挾夫佐恵『三好達治の詩と文学——記念講演のこと——』（『秋』Vol.6、No.6（秋）発行所、（一九六六—七）p.101）。
- 〈36〉 福田清人『三好達治さんのこと——『測量船』周辺——』（『秋』Vol.6、No.6、p.8）。
- 〈37〉 川崎寿彦『分析批評入門（7） 作品をとく鍵 XVII』（『国文学 解釈と鑑賞』Vol.31、No.12（一九六六—一）p.182）。
- 〈38〉 鮎川信夫『詩の見方——近代詩から現代詩へ——』（思潮社、一九六六—一）pp.141〜142）。
- 〈39〉 中野重治『三好達治 人と作品』（『日本詩人全集（20） 三好達治』（新潮社、一九六七—二）p.13 & p.20）。
- 〈40〉 大岡昇平『解説』（『中原中也全集（3）』（角川書店、一九六七—二）p.415）。
- 〈41〉 阪本越郎『鑑賞』雪』（『日本の詩歌（2）』（中央公論社、一九

- 六七一十二) p. 9 V.
- <42> 菅谷規矩雄「抒情と擬ロマネスク——測量船について——」△『南北』(一九六七—十二) V. 『無言の現在』(イザラ書房、一九七〇) pp. 157~161。
- <43> 高橋和巳「三好達治——詩人との出会いと別れ——」△『詩の本』(筑摩書房、一九六七—十二) p. 226 V.
- <44> 三好行雄、越智治雄、野村喬「三好達治『測量船』(1)」△『国文学解釈と教材の研究』Vol. 13 No. 5 pp. 179~180 V.
- <45> 吉田精一「鑑賞」△『日本の詩歌』(9) 三好達治詩集(角川書店、一九六八—九) pp. 252~254 V.
- <46> 河盛好蔵「解説」△『三好達治詩集』(新潮社、一九六八—五) p. 269 V. ※初版は、一九五二年二月である様だが、未確認のため一まずここにおくこととした。
- <47> 安西均『現代詩鑑賞講座 第10巻』(角川書店、一九六九—一) pp. 15~16。
- <48> 山本太郎『詩の作法』(社会思想社、一九六九—三) pp. 179~180。
- <49> 石原八束編著『達治のうた』(社会思想社、一九六九—四) pp. 11~14。
- <50> 井伏鱒二「風貌・姿勢——三好達治——」△『サンケイ新聞』(一九六九—四) V. 『釣人』(新潮社、一九七〇—六) pp. 220~222。
- <51> 飛高隆夫「三好達治」△吉田精一、分銅惇作編『近代詩鑑賞事典』(東京堂、一九六九—九) pp. 436~438 V.
- <52> 村野四郎編『三好達治詩集』(旺文社、一九六九—十) p. 11。
- <53> 榊井寿郎編著『三好達治詩がたみ 旅人』(宝文館、一九六九—十二) pp. 6~7。
- <54> 安東次男『現代詩の展開』(思潮社、一九六九—十二) pp. 359~360。
- <55> 古田弘、西郷竹彦「詩教材をどう読むか——三好達治『雪』をめぐる——」△『国語の教育』No. 22(国土社、一九七〇—二) pp. 72~84 V.
- <56> 関良一「三好達治と古典詩歌」△『国文学 解釈と教材の研究』Vol. 15, No. 4(一九七〇—三) pp. 96~97 V.
- <57> 石原八束「風狂の詩人」△『三好達治詩集』(一九七〇—四) V. 『石原八束『三好達治』』(筑摩書房、一九七九—十二) pp. 164~169。 ※石原八束『秋琴帖』(皆美社、一九七三—十二) pp. 104~111。
- <58> 安西均「詩のレトリック」△『現代詩人会編、詩をどう読むか』(社会思想社、一九七〇—七) pp. 182~183 V.
- <59> 丸谷才一「私の教科書批判(国語)」△『朝日新聞』(一九七〇・九・二八) V.
- <60> 黒田三郎「はかない原形」△山本太郎他編『わが愛する詩』(新装版)(思潮社、一九七〇) p. 154 V.
- <61> 高田敏子『詩の世界』(ポプラ社、一九七二) pp. 53~57。 ※渡辺皓介氏の提供による。
- <62> 西郷竹彦「詩の△まとめよみ▽△つづけよみ(一)」△『教育学国語教育』No. 184(一九七三—十二) pp. 120~125 V.
- <63> 西郷竹彦「詩の△まとめよみ▽△つづけよみ(二)」△『教育学国語教育』No. 185(一九七三—十二) pp. 118~123 V.
- <64> 中桐雅夫「詩の読み方」△『詩の読みかた詩の作り方』(晶文社、一九八〇—三) pp. 183~191 V.
- <65> 石原八束「秋の風鈴」△『東京新聞』(一九七四・一・十三) V. 『三好達治』 pp. 47~48。
- <66> 西郷竹彦・小海永二「対談」日本近代詩教材化の諸問題」△『文芸教育』No. 11(明治図書、一九七四—五) p. 29 V.
- <67> 石原八束「漂泊の軌跡」△『国語』(一九七四—九) V. 『三好達治』 p. 185。
- <68> 石丸久「私の好きな達治の作品——『雪』——」△『解釈』Vol. 20, No. 9(教育出版センター、一九七四—九) p. 54 V.
- <69> 小川和佑「三好達治——その人と作品——」△『解釈』Vol. 20, No. 9, p. 7 V.
- <70> 長谷川泉「三好達治の手法——そのイメージと音楽性をめぐって」△『解釈』Vol. 20, No. 9, pp. 11~12 V.
- <71> 安田保雄「三好達治における西洋——測量船を中心に——」△『解

- 〔積〕 Vol. 20、No. 9、pp. 25～26。
- 〈72〉 小高根二郎「中也・静雄・達治の間——その抒情の原質である暗黒部と傷——」△『国文学 解釈と鑑賞』Vol. 40、No. 4 (一九七五—三) p. 9。
- 〈73〉 木村幸雄「言語感覚の敵しき」△『国文学 解釈と鑑賞』Vol. 40、No. 4、pp. 90～91。
- 〈74〉 榊井寿郎「達治における詩と現実」△『国文学 解釈と鑑賞』Vol. 40、No. 4、p. 85。
- 〈75〉 萬田務「三好達治『測量船』」△『花筐』△『国文学 解釈と鑑賞』Vol. 40、No. 4、p. 145。
- 〈76〉 安西均「農村の夜の雪、都会の夜の雪」△『野火』(一九七五—三)△『冬の麦』(日本基督教団出版局、一九七七一四) pp. 84～94。
- 〈77〉 吉本隆明「初期歌謡」△赤羽淑、橋本不美男、藤平春男編『和歌の本質と展開』(桜楓社、一九七五—五) pp. 14～15。
- 〈78〉 井伏鱒二「好きな詩——『雪』と『鹿』について——」△『俳句とエッセイ』(一九七六一)△『現代詩読本 7 三好達治』p. 214。
- 〈79〉 鈴木二三雄「三好達治と梶井基次郎」△『フェリス論叢』Vol. 16、(一九七六一二) p. 2 & p. 3。
- 〈80〉 川本茂雄「ヤーコフソンの詩字瞥見」△『月刊言語』Vol. 5、No. 2 (一九七六一二) pp. 8～10。
- 〈81〉 石原八束「霧の中の遠い影」△『俳句とエッセイ』(一九七六一五)△『三好達治』p. 230。
- 〈82〉 中野重治「死後十三年——三好達治のこと——」△『海』(一九七六一八)△『現代詩読本 7 三好達治』p. 240。
- 〈83〉 小川和佑「増補改訂版 三好達治研究」(教育出版センター、一九七六一十) p. 32、pp. 209～212、p. 274。※本文中の年の扱いは『三好達治研究』(国文社、一九七〇—十)により一九七〇年とした。
- 〈84〉 小野隆「『測量船』試論Ⅱ——主として同人誌との関係について——」△『共立女子短期大学文学科紀要』No. 20 (一九七七一四) pp. 97～98。
- 〈85〉 大岡信「詩への架橋」(岩波書店、一九七七一六) pp. 161～162。
- 〈86〉 大竹新助「うたのふるさと」(3) 現代詩のとびら開く」(さ・え・ら書房、一九七七一六) pp. 40～41。
- 〈87〉 入沢康夫「詩歌作品の『読み解き』」△『文芸』(河出書房新社、一九七七一七) p. 25。
- 〈88〉 中村稔「三好達治『雪』」△『相馬』No. 88 (相馬美術店、一九七七—七) pp. 10～15。※本資料入手に当っては、中村稔氏及び相馬美術店から格別の御厚意を得た。記して感謝したい。
- 〈89〉 山本健吉「講演」母郷思慕のうた——三好詩・蕪村詩そして芭蕉——(於高山、一九七七・七・二四)『秋』一九七九—二・三月号 (一九七九—三) pp. 30～43。
- 〈90〉 永渕定「表現論」△西郷竹彦編『文芸教育辞典』(明治図書、一九七七一八) p. 71。
- 〈91〉 榊井寿郎「三好達治——達治における詩と現実——」△江頭彦造、高橋渡、山田野理夫編『風土と詩人たち 下』(宝文館、一九七七) p. 164。△『74』と同内容。
- 〈92〉 草部典一他(シンポジウム)文芸研の理論と方法」△『文芸教育』No. 22 (一九七八—一) pp. 48～49。
- 〈93〉 石原八束「犀星の母・達治の母」△『婦人と暮し』(一九七八—三)△『三好達治』pp. 26～27。
- 〈94〉 長沢久「三好達治『測量船』——その抒情の構造について——」△『詩論』No. 1 (大野屋書店、一九七九—七) p. 60。
- 〈95〉 原崎孝「雪」△小海永二編『現代詩の解釈と鑑賞事典』(旺文社、一九七九—三) pp. 42～43。
- 〈96〉 石原八束「三好詩を追うて」△『現代詩手帖』(一九七九—四)△『三好達治』pp. 134～142 & p. 145。
- 〈97〉 石原八束「目の眼」△『目の眼』(一九七九—四)△『三好達治』pp. 123～124。
- 〈98〉 中村稔・大岡信・谷川俊太郎「討議 余情と伝統——その虚飾の世界——」△『現代詩読本 7 三好達治』p. 23。

- 〈99〉清水和「三好達治について——日本的な気分の問題——」△『現代詩読本 7 三好達治』p.191。
- 〈100〉入沢康夫「太郎を眠らせ……」詩の「解釈」とは——△『現代詩読本 7 三好達治』pp.165~171。
- 〈101〉畠中哲夫『三好達治』(花神社、一九七九—七) p.23、p.36、pp.43~44、pp.60~61、pp.168~174。
- 〈102〉佐佐木幸綱「作歌の現場」(2) 詩型の強制力△『短歌』Vol.27、No.2 (一九八〇—二) pp.61~62。
- 〈103〉足立悦男「日常が詩に変わるとき」△『文芸教育』No.29 (明治図書、一九八〇—四) pp.33~34。
- 〈104〉菊池由美「三好達治研究——文語定型詩の形成と本質」△『高知女子大國文』No.16、(一九八〇—八) p.48。
- 〈105〉足立悦男「解釈の根拠——三好達治『雪』をめぐる——」△『第61回全国大学国語教育学会大会要項』(一九八一—二) p.27。＊足立氏のは口頭発表によるものであった為本文中の引用こそないが、氏の発表が本稿の直接契機の一つとなっていることは、筆者自身第62回全国大学国語教育学会における研究発表(注②参照)時にも言及した通りである。
- (6) △No.は、注⑤におけるもの示す。姓・発行年(月は省略) ページを附すこととするが、注⑤におけるページ数が三ページ以下のものは、ページ表記を省略することを原則とする。
- (7) 但し、△太郎△次郎△に続くものを連想して、その中には女性をも加えようとする考え方(「草部」△92(一九七八))もある。
- (8) 例えばこの作品を童話風だとする考え方(△36△福田(一九六六)他)は、この延長線上に発生するのだと筆者は考えている。
- (9) 「雪」解釈史からすると、この作品を「抒情のあたたかさ」(伊藤信△11(一九五三))とする考えは、ここに明確な解答を与えられたことにもなる。
- (10) 「あいまいさ」においてこの作品の魅力を解き明そうとする試みは、ニュークリティシズム(new criticism)を踏まえた川崎寿彦氏に

よってこれより先になされている。(△37(一九六六))
また筆者は、西郷氏と同様な考えを、近年の比喩研究の成果を踏まえて「△雪△」……△眠らせ△という「結合比喩」によっても説明できるのではないかと考えている。

cf.中村明『比喩表現の理論と分類』(秀英出版・一九七七)。

拙稿「文学教材と形象性——比喩・象徴表現をめぐるノート——」
△飛田多喜雄他編『中学校国語科指導法講座(7) 理解④詩歌の研究』(明治図書、一九八二秋発行予定)。

(11) 山本氏は当時古田氏よりの私信をも得ているのであるから(△89(一九七七) p.36) この面における山本氏の責任は極めて重いと云える。

(12) 今回の検討資料では、山本(「前掲」、石原(△96(一九七九))のところまでの確認が可能である。

(13) △眠らせ△の主体を△雪△としている点についてはII(c)参照。

(14) 岡井隆・金子兜太「短詩型文学論」(紀伊国屋書店、一九六三—七)。

(15) 菅谷規矩雄氏の「子守唄(眠らせ唄)」説は、この延長線上に発生する一典型である。「菅谷」△42(一九六七) p.159

(16) 大岡(昇)△40(一九六七)、小高根△72(一九七五)をも併せて参照されたい。

(17) 伊藤信吉氏を「兄弟説」に位置づけられるかは、実は微妙である。

ここでは、従来、中桐氏(△64(一九七三))を始めとする諸氏の整理に一応従っておいたまでである。

(18) 筆者のこうした考えについては左記参照。

拙稿『読み』のレベル設定に関する一考察——八木重吉『母をおも』を具体例として——△『岩手大学教育学部研究年報』Vol.40、No.1、(一九八〇—一) pp.203~218。

(一九八二年十月十五日受理)